

<研究ノート>

「勉強する」「習う」「学ぶ」の使い分けについて —— 使用される話題の観点から ——

李 星

東亜大学 総合学術研究科 人間科学専攻 博士後期課程
中国・咸陽師範学院
173037352@qq.com

《要 旨》

「勉強する」「習う」「学ぶ」という3つの語彙は、「～を身につける」という共通する意味を持つ。そのため、日本語学習者にとって、これらの語の意味を理解するだけでは、適切に使い分けることが難しいという状況がある。

本研究は、学習者の負担を軽減することを目的とし、「話題」の観点から、日本語学習者がこれらの語彙を適切に使い分けるに資する情報を提供することを目的とし、「日本語話題別会話コーパス：J-TOCC」を用いて各語の話題的特徴を考察した。

その結果、各語について以下のような傾向が観察された。

- ① 勉強する：幅広い話題で使用されるが、特に「学校」「夢・将来設計」などの話題で頻出する。
- ② 習う：「スポーツ」に関する話題で使用される。
- ③ 学ぶ：幅広い話題で用いられる。また、特定の話題に限定されない。

以上の結果から、「勉強する」「習う」「学ぶ」の使い分けにおいては、それぞれの語が出現しやすい話題の違いを手がかりとすることで、学習者にとってより実用的で負担の少ない指導が可能になることが示唆された。

キーワード：勉強する、習う、学ぶ、話題的特徴

《目 次》

1. 問題の所在
2. 先行研究
 - 2.1 研究論文
 - 2.2 「話題」分析の必要性と研究課題の設定
3. 使用コーパス・検索ツールと研究手順
4. 対象語彙の話題的特徴
 - 4.1 「勉強する」
 - 4.2 「習う」
 - 4.3 「学ぶ」
5. 考察
6. まとめと今後の課題

1. 問題の所在

近年、日本語教育においては、類義語、特に類義性を持つ実質語の使い分けに関する研究の必要性が求められている。具体的には、岩佐(2011)では、「学習者が語義に関して疑問を抱くのは、類義語・類意形式の使い分けに関する場合が圧倒的に多い」と指摘されており(岩佐2011, p.23), 学習者にとって語彙の使い分けが大きな課題であることがわかる。しかし、その一方で、山内(2013a, p.5)では、「類似表現のうち、特に実質語に関するものは、日本語学者の研究対象とされにくいため、日本語教師が自ら研究を行う必要がある」とし、実質語に関する研究の必要性に反して、その研究が不足していることが指摘されている。現状としては、金澤・山内編『一語から始める小さな日本語学』(2022)の刊行を契機に、実質語に焦点を当てた研究は進みつつある。しかし、実質語、そして類義語に関する体系的な分析と教育現場での活用を視野に入れた研究は依然として現場の教員に依存しているのが現状である。

さて、本研究は、上記の背景を踏まえ、ケーススタディとして、類義性を持つ実質語である「勉強する」「習う」「学ぶ」を対象として、その使い分けに資する要因を明らかにすることを目的としたものである。「勉強する」「習う」「学ぶ」は、『使い方の分かる類語例解辞典』(小学館辞典編集部, 1994, pp.621-622)においては、「～を身につける」という共通の意味を持つとされている。しかし、実際にはこれらの語彙は互いに置き換え可能な場合もあれば、置き換えると不自然であり、違和感が生じる場合も観察される。

例えば、中国語を母語とする学習者の場合、次のような事例が観察される。下記の(1a)～(2a)は筆者の日本語授業で確認された誤用例である(「?」は日本語として不自然であることを表す)。

- (1) a. ? 健康のために、水泳を勉強します。
(中国語母語話者による作文、筆者収集)
- b. 健康のために、水泳を習います。
- (2) a. ? 中学校の時に心理学を習った。
(中国語母語話者による作文、筆者収集)
- b. 中学校の時に心理学を勉強した。

ここで、「勉強する」「習う」「学ぶ」の学習順序について、中国国内で広く使われている賀静彬他(編)『新经典日本语基础教程(第二版)』(2019)⁽¹⁾、人民教育出版社・光村図書出版(編)『新版中日交流标准日本语(第二版)』(2013)⁽²⁾、スリーエーネットワーク(編)『大家的日语(第二版)』(2012)⁽³⁾の3種類の教科書を対象として調査を行った。その結果を以下の表1に示す。

表1に示したように、『大家的日语』と『新版中日交流标准日本语』においては、初級の早期の段階で(初めて動詞述語文が導入される課から)「勉強する」と「習う」が連続して導入されており、その後、「学ぶ」が中級段階で導入されている。一方、『新经典日本语基础教程』においては、「勉強する」「習う」に加え、「学ぶ」も第一冊における初めて動詞述語文が導入される課から連続して導入されている。この事実を踏まえると、対象とする類義語彙は、ほぼ同じ学習段階で導入されていると言える。

また、表1に示された3種類の教科書における対象語彙に対する説明は表2の通りである。

表1 教科書における研究対象語彙の学習順序 (() の中の数字は教科書の総課数)

教科書 対象語彙	『新经典日本语基础教程』	『新版中日交流标准 日本语』	『大家的日语』
勉強する	第1冊第4課(14)	初級(上)第5課(24)	初級(1)第4課(25)
習う	第1冊第8課(14)	初級(上)第8課(24)	初級(1)第7課(25)
学ぶ	第1冊第11課(14)	中級(下)第21課(16)	中級(1)第6課(12)

(注) 表中の『新版中日交流标准日本语』中級(下)は第17課から第32課まで、総課数は16課である。

表2 教科書における研究対象語彙に関する説明（中国語訳）

教科書 対象語彙	『新经典日本语基础 教程』	『新版中日交流标准 日本语』	『大家的日语』
勉強する	学习	学习	学习
習う	学习；练习	学习	学习
学ぶ	学习	学习；模仿	学习

表2に示したように、語彙に関する説明は中国語訳のみが提供されている。それに加えて、主な中国語訳として使われているのは「学习」(北京对外経済貿易大学他 1995, pp. 1416, 1715, 1793)のみで、中国語母語話者がそれらを使い分けるにあたっては困難が予想される。

さらに、筆者が確認した類義語辞書⁽⁴⁾では、3語の使い分けに関する説明は「学習内容の分類の違い」、「文体の差」や「指導者の有無」などに基づいて説明されている。しかし、学習内容(ヲ格)の観点だけでは、語彙間で重複する部分も見られる。例えば、『使い方の分かる類語例解辞典』(小学館辞書編集部 1994, pp.621-622)では、学習内容について、「勉強する」は「知識や技能」、「習う」は「学問や技芸」であり、「学ぶ」は「学問や技芸、知識や技術」であることから、3語において、重複する学習内容が存在していることがわかる。つまり、学習内容(ヲ格)にのみ焦点を当てるアプローチ自体に限界があることが分かる。また、「文体の差」や「指導者の有無」などの基準を併用すると、かえって使い分けに関する規則が多くなり、その結果、学習者の負担が増大することが予想される。さらに、類義語辞書間では、「勉強する」の説明に「知識・技能」(『使い方の分かる類語例解辞典』、小学館辞書編集部 1994, p.621), 「学問・技能」(『類義大辞典』、柴田・山田 2003, p.262)といった記述の不一致が確認される。また、「知識や技能」といった抽象的な説明についても、それだけでは、学習者の理解を助けるとは言い難い。

このように、①教科書ではほぼ同じ学習段階で導入されていること、②説明が翻訳のみ、③類義語辞書でも、学習内容の重複多角的基準の併用や記述の不一致、そして抽象的な説明に留まることが、(1a)～(2a)のような誤用の一

因となっていると考えられる。

このような状況に対して、庵(2017)では、学習者に対する説明について、「規則の数を増やすと、覚えきれなくなる」(庵 2017, p.139)ため、「規則の数は可能な限り少なくする」(庵 2017, p.140)ことが重要であることを指摘している。すなわち、学習者がよりよく運用ができるようにするために、学習者の負担を軽減できる簡潔な規則が求められるということである。

ここで、学習者の負担を軽減するという観点から、一番有効な手立ては何であるかについて、中俣他(2023, pp.45-46)では、「学習者に類義語を意味の観点から説明するのは難しい。また、コロケーションで区別することもできるが、コロケーションをリストの形で提示するには負担が大きい。しかし、「特徴的な話題」については数も少なく、学習者にとっての負担も小さいと考えられる」と主張されている。この主張を踏まえると、「話題」の観点から分析を行うことによって、従来よりも負担の少ない形で使い分けの規則を説明できる可能性がある。そこで、本研究は「話題」の観点から考察を行うことにする。

以上の問題意識を踏まえ、本研究では、対象とする3つの語彙について、学習者の負担を軽減することを目指し、「話題」の観点から出発し、研究対象語彙の使い分けに資する特徴を抽出することを目的とする。より具体的には、『日本語話題別会話コーパス：J-TOCC』を用い、話題的特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

本章では、「勉強する」「習う」「学ぶ」に關

して、研究論文の記述を検討し、残された課題をまとめる。その上で、「話題」の観点からの分析の必要性を述べ、研究課題を設定する。

2.1 研究論文

「勉強する」「習う」「学ぶ」の使い分けに関しては多くの研究が存在している（金 2015, 曲 2015, 権 2017, 鐘 2021, 蘇 2015, 張 1986, 林 2012, 峯村 1978）。これらの研究では、主に「学習内容」（金 2015, 曲 2015, 権 2017, 鐘 2021, 蘇 2015, 張 1986, 林 2012, 峯村 1978）、「指導者の有無」（金 2015, 曲 2015, 鐘 2021, 張 1986, 峯村 1978）、「語義の違い」（金 2015, 曲 2015, 権 2017）や「文体の差」（曲 2015, 張 1986）などの観点から分析されている。以下、先行研究における各分析において残された課題を述べる。

まず、「学習内容」の観点では、語彙間に重なりが確認される。例えば、峯村（1978, pp.120-121）によれば、「勉強する」と「学ぶ」の学習内容は「娯楽・遊び以外の技能と知識」とされており、両者には重複する部分があることが分かる。また、このような、「知識」か「学問」か「技術」といった抽象的な説明のみでは、具体的な事例が示されないため、学習者の理解の助けになるとは言い難い。実際、庵（2017, p.139）では、抽象的な説明だけでは学習者にとって理解の助けとならず、無意味であることが指摘されている。

また、どのような学習内容が「学問」に属し、どのような学習内容が「技術」に属するのか、学習者が明確に判別できない場合も少なくない。例えば、「技術」という語は『分類語彙表（増補改訂版）』⁽⁵⁾において、「学問・学科」「才能」「技術・設備・修理」という3つのカテゴリーにまたがって分類されている。そのため、文脈的情報が与えられない限り、ある語が「学問」「才能」「技術」のいずれに該当するのかを区別することは困難である。このように、「学習内容」の抽象的な分類だけでは、対象語彙の使い分けを明確に説明することは難しい。

なお、「学習内容」に関する分析については、

研究間で記述の不一致が見られる。例えば、「勉強する」について、峯村（1978, p.121）は「技能」「知識」、張（1986, p.50）は「学問」「知識」、林（2012, p.319）は「語学」および体験学習を含まないもの、曲（2015, p.22）は「学問」「技術」「経験」、蘇（2015, p.49）は「学問」「技術」、鐘（2021, p.73）は「経験」「知識」「技能」としており、多様な観点が示されている。他の2語についても同様であり、各研究論文で「学習内容」に関する観点には違いが多く見られる。

次に、「指導者の有無」の観点からの分析についても、「勉強する」「習う」「学ぶ」の使い分けを明確に区別することはできない。例えば、張（1986, pp.49-50）は、「勉強する」は指導者が存在しない場合に用いられ、「習う」は指導者の存在が必要であり、「学ぶ」は指導者から教えられる場合だけでなく独学の場合にも使用できると指摘している。すなわち、「学ぶ」と「勉強する」、そして「学ぶ」と「習う」には、それぞれ重複する部分が存在することがわかる。よって「指導者の有無」のみの観点によって使い分けを提案することは有効とは言い難い。

さらに、「語義の違い」に関する分析は、説明が抽象的であり、覚えにくく、学習者の負担が大きいと考えられる。例えば、権（2017, pp.248-254）では、「学ぶ」の語義は「ある事柄を教えてもらう」や「抽象的なものから何かを発見、会得する」、「ことがらを理解する」などの9個の語義を列挙している。しかし、その内の3つは、「習う」の語義と重なっている。それに加えて、重複している語義についてはニュアンスが同じであるかについて考察されていない点にも課題が残る。

最後に、「文体の差」に関する分析については、張（1986, p.50）では、「学ぶ」は書き言葉でよく使われると指摘されている。その一方で、曲（2015, p.22）では、「勉強する」「習う」「学ぶ」の文体差を比較した結果、この3語は、話し言葉として用いられやすいと指摘している。

この点について、筆者は中納言のコーパス横

表3 『KOTONOHA』の「話し言葉・書き言葉」における対象語彙の検索結果

カテゴリー	コーパス	検索対象語彙	勉強する	習う	学ぶ
			調整頻度	調整頻度	調整頻度
書き言葉	BCCWJ	104,911,460	33.987	15.031	70.657
	SHC	33,404,844			
話し言葉	CSJ	7,576,046	72.686	41.991	35.688
	CEJC	2,419,171			
	CEJC-Child	370,846			
	SSC	528,589			
	NUCC	1,135,329			
	CWPC	186,906			

(注) 表中のデータについて、ここでは、書き言葉、あるいは話し言葉として使用されやすいかを判定するために、学習者の話し言葉、および書き言葉のデータは除外し、日本語母語話者のデータのみを用いている。なお、表中の調整頻度は100万語あたりの頻度である。また、比較に使用した各コーパスの正式名称は次の通りである。BCCWJ：現代日本語書き言葉均衡コーパス；SHC：昭和・平成書き言葉コーパス；CSJ：日本語話し言葉コーパス；CEJC：日本語日常会話コーパス；CEJC-Child：子ども版日本語日常会話コーパス；SSC：昭和話し言葉コーパス；NUCC：名大会話コーパス；CWPC：現日研・職場談話コーパス。

断検索機能である「まとめて検索『KOTONOHA』」⁽⁶⁾を用いて検索を行った。その結果は以下の表3の通りである。

表3のデータから、「勉強する」「習う」の2語について、話し言葉のカテゴリーにおける調整頻度⁽⁷⁾が書き言葉のカテゴリーよりも高いことがわかる。一方、「学ぶ」については、書き言葉における調整頻度が話し言葉における調整頻度を上回っており、書き言葉として使用されやすい傾向にあることが確認される。このように、文体差のみを基準にした場合、「学ぶ」は「勉強する」と「習う」と異なり、書き言葉で使用される傾向があることは説明できる。しかし、依然として「勉強する」と「習う」の使い分けを十分に説明することはできないという課題が残る。

このように、「学習内容」、「指導者の有無」、「語義の違い」、そして「文体の差」といった観点は、それだけでは学習者の負担軽減に資する観点であるとは言い難い。

2.2 「話題」分析の必要性と研究課題の設定

2.1節の検討を通じて明らかになったように、「学習内容」や「語義の違い」は抽象的な説明が多くてわかりにくいため、かえって学習者の負担を増大させることになる。また、「学習内

容」の観点に加え、「文体の差」や「指導者の有無」などの多角的な観点による使い分けの提案を行うことは、かえって規則の数を増やすため、学習者にとって負担が大きくなる。

この問題を克服するための方略として、話題の観点に注目することが挙げられる。話題の観点の有効性については、前述した中俣他（2023, pp.45-46）の記述に加えて、橋本（2018, p.31）でも「語彙教育において話題が重要な要素である」と指摘している。さらに、建石（2023, p.211）においては、類義語分析において「話題」の観点の導入が提案されている。

さて、この「話題」という観点を導入することには、複数の意義があると考えられる。

第一に、中俣他（2023, pp.45-46）では、「学習者に類義語を意味の観点から説明するのは難しい。また、コロケーションで区別することができるが、コロケーションをリストの形で提示するのは負担が大きい。しかし、「特徴的な話題」については数も少なく、学習者にとっての負担も小さいと考えられる」と主張している。この主張は、「規則の数は可能な限り少なくする」（庵 2017, p.140）という説明に適うものであり、学習者の負担を軽減できる可能性がある。

第二に、語彙の使用は文法的適格性のみなら

ず、談話文脈や言語活動の目的と密接に関連している。したがって、語彙がどのような話題領域において好んで用いられるかを明らかにすることは、実際の使用傾向をより的確に捉える手がかりとなる。

第三に、学習者は場面や目的に応じて語彙を選択する必要があるが、「話題」の観点を提示することで、使用場面の想起を促し、文脈に即した語彙選択を可能にする。

そして、第四に、「話題」は語彙の意味的な特徴と実際の運用とを橋渡しする概念であり、ある語が特定の文脈の中でどのように使用されるのかを理解する際の手がかりとなる。より具体的には、ある語について、抽象化された意味説明だけではその運用実態を捉えることはできない。そこで、この「話題」の観点が有効となる。「話題」の観点は、ある語がどのような話題において、どのような語と共に用いられるのかといった具体的な情報を提供する。これによって、学習者にはその語の意味を理解するための情報だけでなく、実際にその語を運用するための情報も同時に提供されることになる。

このように、「話題」の観点を中心として語彙の導入をはかることは、語彙の意味・用法を多面的に捉え、学習者の語彙運用能力の向上に資する枠組みを提供する可能性が高いと言える。そのため、本研究では話題の観点から「勉強する」「習う」「学ぶ」のそれぞれについて分析を行い、使い分けに資する情報を抽出することにする。

ここで、本研究における「話題」の定義について述べる。山内（2013c, pp.1-2）では、日本語教育において、「言語活動」と「言語素材（語彙・文法）」との関係を重視し、学習者が実際のコミュニケーションにおいて日本語を効果的に使用できるようにするための枠組みを提示している。その中において、「言語活動」と「言語素材」を「話題」という枠組みから整理する方法を提案している。また、中俣（2023, pp.6-7）では、テキスト内の内容から話題を推測するボトムアップ的な処理を「テキスト内話題」、話題が先に決まり、それに基づいてテキストが構成されるトップダウン的な処理を「テ

キスト外話題」と定義している。

これらの議論を踏まえ、本研究では、山内（2013c）と中俣（2023）に従い、「話題」を「特定の言語活動を遂行するために必要な概念であり、かつ言語活動において発話の中心となる内容や主題」と定義することにする。

以上の検討を踏まえ、本研究では以下の研究課題（Research Questions）を設定する。

RQ：「勉強する」「習う」「学ぶ」はそれぞれ使用されやすい特定の話題があるのか、それぞれの話題的特徴⁽⁸⁾を明らかにする。

3. 使用コーパス・検索ツールと研究手順

本章では、本研究で使用するコーパス・検索ツールと検索手続きについて紹介する。本研究では、話題的特徴を分析するために『日本語話題別会話コーパス：J-TOCC』⁽⁹⁾を用い、対象語彙の分析・考察を行う。

『日本語話題別会話コーパス：J-TOCC』（以下 J-TOCC）は、中俣尚己・太田陽子・加藤恵梨・澤田浩子・清水由貴子・森篤嗣によるグループによって「話題が語彙・文法・談話ストラテジーなどに与える影響を検討するため」（中俣他, 2021b, p.11）に構築されたコーパスである。J-TOCC の特徴は中俣他（2021b, p.11）では以下のように説明されている。

- ① 15 の話題を選定し、大学生のペアに 5 分ずつ話してもらったことで、話題以外の条件が統制されている。
- ② 話題は身の周りの話題が 11、社会にかかる話題が 4 である。
- ③ 1 つの話題につき 120 ペア、合計 10 時間の会話が収められており、およそ 11 万語に相当する。
- ④ ペアは性別の組み合わせや録音地の東西でバランスをとっている。
- ⑤ 話者がそれぞれの話題についてどのぐらい詳しいかという話題知悉度についても尋ね、付属データとして添付している。

次に、検索条件について説明する。対象語彙の話題的特徴を分析するため、J-TOCC を用い、エディターソフトである「秀丸」ver.9.37 「(有) サイトー企画」を使用し、以下の検索条件で grep 検索⁽¹⁰⁾を行った（正規表現⁽¹¹⁾含む）。各々の語の検索条件は以下の通りである。

「勉強する」の検索条件：勉強 [さしすせで⁽¹²⁾]」

「習う」の検索条件：習 [わいうえおっ]

「学ぶ」の検索条件：学 [ばびぶべぼん]

なお、今回は動詞である対象語彙を分析対象とするため、「社会勉強する」のような「複合名詞+する」という事例は分析対象から除外した。また、「見習って」などのような対象語彙ではない用例も除外した。

次に、話題的特徴を分析する際には、話題間の比較が重要となる。中俣他 (2021b, p.17)によると、括弧や句読点などの補助記号を除いた 15 の話題ごとの総語数は、いずれも約 11 万語であるとしている。調整頻度の指標として用いられる PMW (Per Million Words) は、 $PMW = \text{粗頻度} \div \text{各話題の総語数} \times 1,000,000$ で計算される。しかし、J-TOCCにおいては各話題の総語数がほぼ等しいことから、粗頻度をそのまま利用して検討することが可能であると考えられる。これについては、太田 (2023, p.145) でも「J-TOCC は、コーパスサイズが概ね揃っているため、粗頻度の傾向がそのまま使用頻度の多寡を反映している」との見解を示している。以上を踏まえ、本研究では粗頻度を利用して、話題間の比較を行う。

ただし、J-TOCC における単純な粗頻度だけでは語の話題的特徴を十分に捉えることは難しい。そのため、結果を支える指標が別途必要になる。この点について、ある語の出現数がいくつであれば「特定の話題でよく使用される」と判断できるかについて、田中・近藤 (2011) では LLR 値が 10.83 以上の語を特徴語と定義している。また、中俣他 (2021a, p.200) では、特徴話題を「ある語が特徴語となる話題」と定義している。これらを踏まえ、本研究では特定

の語がどの話題で顕著に出現するかについて、統計的に評価できる対数尤度比 (Log-Likelihood Ratio, LLR) を指標として用いる。これにより、より客観的に話題的特徴を明らかにすることを目指す。計算方法については田中・近藤 (2011) に従う。具体的には、以下の式を用いる。

$$2(alna + blnb + clnc + dlnd - (a+b)ln(a+b) - (a+c)ln(a+c) - (b+d)ln(b+d) - (c+d)ln(c+d) + (a+b+c+d)ln(a+b+c+d))$$

a : 該当資料での該当語の度数

b : 参照資料での該当語の度数

c : 該当資料の延べ語数 - a

d : 参照資料の延べ語数 - b⁽¹³⁾

ln は自然対数を表す。a または b が 0 の場合, alna または blnb を 0 として計算する。

なお, ad - bc < 0 の場合の場合, -1 を乗じる補正を行う。

上記の計算方法で、LLR が 10.83 以上のデータを確認し、対象語彙がどの話題において特徴語であるのかを考察する。

最後に、文脈判定⁽¹⁴⁾（対象語彙が出現する文脈を日本語母語話者が判定する作業）について述べる。対象語彙がよく出現する「話題」における特徴を分析するためには、J-TOCC の用例を観察する必要がある。しかし、J-TOCC は話し言葉コーパスである。そのため、目的語や格助詞などの省略が多いことが予想される。このような場合には、日本語母語話者による文脈判定のほうが、判定の信頼性が高いと考えられる。そこで、本研究では文脈判定が必要な場合には、複数の日本語母語話者に判定を依頼した。第 4 章で分析した文脈は、筆者以外の複数の日本語母語話者による協議の結果に基づいている。

4. 対象語彙の話題的特徴

本章では、J-TOCC を用いて、対象語彙の話題的特徴を明らかにする。

(「学校」 東日本 男女⁽¹⁶⁾ E-216-07)

4.1 「勉強する」

J-TOCC を用いて「勉強する」を検索した結果、185 件のデータ⁽¹⁵⁾を抽出した。その後、目視で用例を確認し、「社会勉強した」、「受験勉強した」などのような「複合名詞+する」のような分析対象とならないデータを除き、最終的に 164 件のデータを分析対象とした。次の表 4 は、「勉強する」における話題別の用例出現数と LLR をまとめたものである。

表 4 から、「勉強する」はすべての話題において使用されていることがわかる。「勉強する」の各話題における出現率をより詳しく観察すると、「学校」の話題では 40 件 (24.39%)、「夢・将来設計」では 27 件 (16.46%) と、ほかの話題に比べて顕著に多く出現していることが分かる。また、第 3 章で述べた LLR の計算方法により、LLR 値が 10.83 以上のデータを抽出した。その結果、「学校」という話題における LLR は 51.589、また、「夢・将来設計」という話題における LLR は 19.371 という数値が算出された。したがって、「勉強する」は「学校」と「夢・将来設計」という 2 つの話題において特徴的に使用される語であると言える。

それでは、「勉強する」が「学校」および「夢・将来設計」の話題で使用される特徴を明らかにするため、これら 2 つの話題における用例を確認する。

(3) え、 それ何、 英語を勉強するため？

(4) だって、 高校受験のとき勉強せんで本読んで怒られた。

(「学校」 西日本 男男 W-103-07)

(5) 中学校で、 お前ほんまに勉強せな高校入れへんからなみたいな、 言われて。

(「学校」 西日本 男女 W-209-07)

(3) ~ (5) は「学校」という話題における「勉強する」の用例である。(3) の用例では、「英語」という共起名詞が明示されており、文脈により、ホームステイ先で学校に通う目的として「英語を勉強する」ことが述べられている。この場合、「英語」は学校で習得可能な学科として理解できる。(4) と (5) の用例では、「勉強する」の目的語は省略されているが、文脈上、高校受験や中学校での学習内容、すなわち科目内容を指していることが読み取れる。上記のような目的語が学科を指していることが多く見られる。

以上の分析結果から、「勉強する」は「学校」という話題において使用される傾向が確認される。

次に、「夢・将来設計」という話題における用例を挙げる。

(6) でも、 公務員っていってさ、 でも、 ま、 半年、 半年から 1 年、 長くて。 半年ぐら

表 4 J-TOCC における「勉強する」の話題別出現数と LLR

話題	勉強する		話題	勉強する	
	出現数	LLR		出現数	LLR
01 食べること	1(0.61%)	-15.258	09 アルバイト	11(6.71%)	-0.000009
02 ファッション	5(3.05%)	-4.530	10 動物	2(1.22%)	-11.837
03 旅行	9(5.49%)	-0.378	11 天気	10(6.10%)	-0.094
04 スポーツ	7(4.27%)	-1.886	12 夢・将来設計	27(16.46%)	19.371
05 マンガ・ゲーム	10(6.10%)	-0.130	13 マナー	2(1.22%)	-12.218
06 家事	10(6.10%)	-0.117	14 住環境	5(3.05%)	-3.987
07 学校	40(24.39%)	51.589	15 日本の未来	14(8.54%)	1.165
08 スマートフォン	11(6.71%)	0.003			
合計出現数	164(100%)				

いは、ちゃんと勉強しないときついよって言ってたね。

(「夢・将来設計」 東日本 男男
E-118-12)

(7) 何も考えんかった。もう取りあえず大学で遊ぶことしか考えなかった。そのために一心で勉強してた。本当に。そう。いや、そう、部活も入ろうか迷ったけど、ま、最初はやっぱ、普通に大学で遊びたいっていうのが一番だったね。うん。まあ、でももうそんなこと言っとれん時期になりましたよ。大学半分過ぎて。

(「夢・将来設計」 東日本 男男
E-101-12)

(8) そうそう。せっかく英語とかさ、今まで苦労して勉強してきた(笑)。多少は使いたい、なあー、と(笑)。

(「夢・将来設計」 東日本 男女
E-205-12)

上記の(6)では、話者が将来の進路として公務員を志望するにあたり、合格のためには半年から1年程度の「勉強」が必要であるという認識を示している。また、(7)では、話者が大学入学を目指して「一心で勉強してた」と述べており、大学で遊ぶことを第一の目標としながらも、そのためには受験勉強が必要であったとい

う意識が示されている。「勉強する」が、将来の進学先である大学生活(遊びを含む)という具体的な将来像の実現に向けた手段として機能していることがわかる。さらに、(8)では、話者がこれまで努力して英語を「勉強してきた」ことを振り返り、その学習成果を将来多少なりとも活かしたいという希望を述べている。「勉強する」が、現在までの学習活動の蓄積と、今後のキャリアや生活設計においてその知識を活用したいという自己実現意識とつなぐ役割を果たしていることがわかる。

以上の(6)～(8)の用例のように、「勉強する」は公務員試験、大学受験、英語といった目標達成に必要な具体的な分野や科目と共に起する傾向がある。すなわち、「夢・将来設計」という話題における「勉強する」は将来像を支えるために選択された学習内容と結びついて用いられる傾向があることがわかる。

以上、「勉強する」は幅広い話題で使用されるが、特に「学校」「夢・将来設計」などの話題で頻出する傾向があり、学校で習得できる学科や将来像を支える学習内容と共に起することが確認された。

4.2 「習う」

この節では、「習う」の話題的特徴について述べる。

検索の結果、「習う」について、114件のデータを抽出した。その後、用例を確認し、「習い事」「要練習って」「見習って」のような分析

表5 J-TOCCにおける「習う」の話題別出現数とLLR

話題	習う		話題	習う	
	出現数	LLR		出現数	LLR
01 食べること	0	-8.365	09 アルバイト	0	-8.617
02 ファッション	0	-8.734	10 動物	2(3.23%)	-1.501
03 旅行	1(1.61%)	-3.579	11 天気	9(14.52%)	4.665
04 スポーツ	31(50%)	85.156	12 夢・将来設計	1(1.61%)	-3.418
05 マンガ・ゲーム	1(1.61%)	-3.726	13 マナー	7(11.29%)	1.592
06 家事	5(8.06%)	0.159	14 住環境	0	-8.356
07 学校	3(4.84%)	-0.364	15 日本の未来	1(1.61%)	-3.306
08 スマートフォン	1(1.61%)	-3.521			
合計出現数	62(100%)				

対象となるデータを除き、最終的に62件のデータを分析対象とした。その結果が表5である。

表5によると、「習う」は「食べること」、「ファッション」、「アルバイト」、「住環境」の4つの話題を除き、11の話題で出現している。そのため、使用範囲が比較的広いことが伺える。の中でも、「スポーツ」の話題において50%を占めていることから、「スポーツ」の話題に突出しているのが特徴であると言える。また、表5のLLR値に基づき、LLRが10.83以上のデータを抽出した結果、「スポーツ」という話題における「習う」のLLRは85.156という数値が算出された。したがって、「習う」は特に「スポーツ」という話題において特徴的に使用される語であると言える。

では、「スポーツ」の話題ではどのように使用されるかについて、用例を確認する。

(9) 保育園から水泳習ってて、で、小1
 (「スポーツ」 東日本 女女
 E-303-04)

(10) 習ったことは、あ、スイミングスクールぐらい。
 (「スポーツ」 東日本 男男
 E-108-04)

(11) うん。ただ、技術は習うやろうけど、そこまでなんか、し、なんか、上から教

わるようなイメージないし。

(「スポーツ」 西日本 男男
 W-116-04)

(9)と(10)は「習う」と「水泳」や「スイミング」といった水泳関連の用例である。このような用例は16例あり、「スポーツ」という話題における「習う」の全体(31例)の約51.6%を占めている。また、「水泳」以外にも、「バドミントン」、「卓球」、「テニス」など具体的なスポーツ種目名が共起していることが確認される。さらに、(11)のように、スポーツに関する「技術」も共起名詞として現れている。このことから、「スポーツ」の話題における「習う」がスポーツ種目名など特に「水泳」、および特定スポーツ技能と共に起しやすいという特徴があるといえる。なお、「水泳」「バドミントン」や「卓球」などの習得は身体的動作が必要であると考えられる。

以上を踏まえると、「習う」は身体的動作を伴う「スポーツ」に関する話題で多く使用される傾向があり、特に「水泳」などのスポーツ名と共に起することが確認された。

4.3 「学ぶ」

J-TOCCを使って検索した結果、「学ぶ」の用例としては、73件のデータを抽出した。その後、目視で用例を確認し、「中学んとき」のような「(名詞である) 中学+(話し言葉である) ん」のパターンは研究対象ではないため分

表6 J-TOCCにおける「学ぶ」の話題別出現数とLLR

話題	学ぶ		話題	学ぶ	
	出現数	LLR		出現数	LLR
01 食べること	1(2.04%)	-2.173	09 アルバイト	9(18.37%)	7.441
02 ファッション	3(6.12%)	-0.037	10 動物	1(2.04%)	-2.341
03 旅行	2(4.08%)	-0.599	11 天気	3(6.12%)	-0.026
04 スポーツ	1(2.04%)	-2.369	12 夢・将来設計	6(12.24%)	2.156
05 マンガ・ゲーム	4(8.16%)	0.136	13 マナー	4(8.16%)	0.118
06 家事	2(4.08%)	-0.643	14 住環境	1(2.04%)	-2.168
07 学校	4(8.16%)	0.166	15 日本の未来	5(10.2%)	1.028
08 スマートフォン	3(6.12%)	-0.018			
合計出現数	49(100%)				

析対象から除き、最終的に49件のデータを分析対象とした。次の表6は、「学ぶ」における話題別の用例出現数をまとめたものである。

表6によると、「学ぶ」について、15の話題に出現しており、広い話題で使われることが窺える。しかし、最も頻度の多い「アルバイト」でもその頻度は9件(18.37%)である。また、表6のLLRに基づき、「学ぶ」に関しては10.83を超えるLLR値は算出されなかった。そのため、ある話題に突出して使われている語とは言い難い。別の言い方をすれば、「学ぶ」は幅広い話題で用いられ、特定の話題に限定されないと見えそうである。

ここでは、「学ぶ」が「勉強する」「習う」とどのように異なるのかを明らかにするために、「アルバイト」「夢・将来設計」「学校」と「スポーツ」といった話題における用例を確認する。

まず、最も出現頻度の高い「アルバイト」の話題における用例を確認する。

(12) 時間過ぎたーって思っている人もいると思うし、あと、いかに手を抜いて、それをばれないようにしながら人間関係を保つつつ、でも、自分のストレス値を減らして、同じお金を得るかみたいなスキルが学べる。
 (「アルバイト」 東日本 男女
 E-220-09)

(13) いや、まあ、それを学ぶ機会なんじゃないの？社会出た後に、転職ーをするのかしないのか、まあ。どこにそのしきい値があるかなんでしょうけどね、人それぞれ。僕はー、アルバイ、トは、何だろうな。昔、こう、最初、いっちゃん最初が高校1年、でー、回転寿司とかやっててん。握ってた。

(「アルバイト」 西日本 男男
 W-110-09)

(12) の文脈では、話者がこれまでのアルバイト経験を振り返り、その経験を通じて「時間

の使い方」や「労働の価値」、「人間関係の構築」そして「ストレス管理の方法」といった社会的・精神的なスキルを身につけたことが述べられている。また、(13)の文脈では、アルバイトの経験を通じて、社会に出た後の働き方や転職の判断基準など、将来のキャリア選択に関わる知見や経験を習得していることが表れている。

これらの用例から、「学ぶ」は「アルバイト」という話題において、人間関係の処理やストレス対処といった社会的スキル、また将来的な職業選択に資する経験の獲得を意味していることが分かる。つまり、単なる作業の習得ではなく、アルバイトを通じて培われる社会的スキルや対人能力と共に起する傾向があるといえる。

次に、「勉強する」が頻出する「学校」や「夢・将来設計」の話題において、「学ぶ」がどのように使われているかを確認する。

(14) もっとね、いろんなことを知りたいなってなっちゃった。なんかそう、結局さ、教員とかさ、塾の先生になったらさ、そうだから中学、高校の勉強しかさ、もうやらないわけじゃん。結局。
 (中略…)

いやまあだから、大学にいる4年間はもちろん違うし、もっといろんなこと学んでるけど、結局だってそれを学んで、じゃあなんかちょっと研究しました。

(「夢・将来設計」 東日本 男男
 E-106-12)

(15) 友達も中学の子とのほうが、まだ付き合い多いしとか考えたら、何か中学やったら、結構まだ周りの目とか気にせえへんし、本音でぶつかってみたいな部分があったから、けんかもめっちゃしたしたいはあるけど、高校ってそういうので、中学校とかで、な、な、学んでから行くやん。

(「学校」 西日本 男女 W-206-07)

(16) え、中学はー、今思い返せばー、何やろう、学んだことはものすごい多いけど

ー、楽しかったかって言われたら全然楽しくはなかった、しー、戻りたく。いや、中3は、だけ楽しかった、俺は。中1、2は、何かあんまり楽しくなかった。
(「学校」 西日本 男男 W-104-07)

(14) の文脈では、話者は「中学、高校の勉強しかやらないわけじゃん」という発言を通して、学校教育における画一的な学習に対する限界を示唆している。そのうえで、大学では「もっといろんなこと」を「学ぶ」ことができるとして述べており、「学ぶ」は中高の教科学習に限定されず、より広範な学問的・社会的知見を探求する行為として捉えられている。次に、(15) では、話者が中学時代の人間関係を振り返り、「中学校とかで、な、な、学んでから行くやん」と述べていることから、高校生活が中学での経験を基盤として成り立っているとの認識が読み取れる。ここでの「学ぶ」は、知識の習得ではなく、喧嘩や本音のやり取りといった実体験を通じて得られる対人スキルや社会的対応力の獲得を意味している。(16) では、話者は中学時代にいじめを経験したことに触れ、「楽しくはなかった」としながらも「学んだことはものすごい多い」と語っている。ここでの「学ぶ」は、教科学習を指すものではなく、むしろ困難な人間関係や葛藤を通して得られた社会的スキルや心理的成长を意味していると解釈できる。

上記の用例から、「学ぶ」は、「勉強する」が具体的な科目や将来像を支える具体的な学習内容と共に起しやすいのに対して、「学校」や「夢・将来設計」の話題において、単なる教科の習得にとどまらず、より広い意味での経験や成長を含む学習を指す傾向があることがわかる。

最後に、「習う」が頻出する「スポーツ」の話題における「学ぶ」の用例を確認する。

(17) 何ていうかな、やっぱ、いいことは学べるけど、ほら俺、弱小バスケ部やったけど、弱小でも学べることってあるわけよ。

(中略…)

上下関係とか、あー、まあ何か、お疲れ

さまです、みたいなこう、あいさつの大切さみたいな。

(「スポーツ」 西日本 男男
W-113-04)

上記 (17) の文脈では、話者が「弱小バスケ部」での経験を通じて、「上下関係」や「あいさつの大切さ」などの社会的なルールやマナーを「学んだ」ことが語られている。

つまり、「学ぶ」は「スポーツ」の話題において、単なるスポーツの技術や技能の習得を超えて、社会性や対人スキルなど、人間的成长に関わる経験の獲得と結びついているといえる。

このように、「学ぶ」は「習う」が具体的なスポーツ名などと共に起しやすいのに対し、スポーツの話題においては、経験を通じて得られる人間的・社会的成長やスキルの獲得を指す傾向があると言える。

以上、「学ぶ」は幅広い話題で用いられ、特定の話題に限定されないと見えそうである。また、「学校」「夢・将来設計」「アルバイト」「スポーツ」などの話題において、具体的な知識や技能の習得にとどまらず、社会性や対人関係に関わる精神的・内面的な経験や成長などと共に起することが確認された。

5. 考察

第2章で検討した先行研究については、「勉強する」「習う」「学ぶ」の使い分けを考える上で、主に「学習内容」「指導者の有無」「語義の違い」、そして「文体の差」などの観点から分析している。しかし、「学習内容」の観点からは語彙間に重複があり、具体的なコロケーション⁽¹⁷⁾情報が欠如しており、抽象的なカテゴリーの説明では学習者にとって理解が難しいことは述べた。さらに、研究間で「学習内容」に関する記述に不一致が見られることや、「指導者の有無」や「文体の差」などの多角的な基準を併用することは、かえって学習者の負担を増す要因となることも指摘した。

この問題に対して、本研究の第4章では、「話題」という観点に着目し、3つの語彙につ

いて、以下の研究課題を設定し、それぞれの話題的特徴を明らかにした。

RQ：「勉強する」「習う」「学ぶ」はそれぞれ使用されやすい特定の話題があるのか、それぞれの話題的特徴を明らかにする。

この問い合わせに対する各実質語の分析結果を以下にまとめます。

- ① 勉強する：幅広い話題で使用されるが、特に「学校」「夢・将来設計」などの話題で頻出する。
- ② 習う：「スポーツ」に関する話題で使用される。
- ③ 学ぶ：幅広い話題で用いられる。また、特定の話題に限定されない。

また、次の表7は研究対象語彙の話題別特徴をまとめたものである。

J-TOCCを用いて各研究対象語彙の話題的特徴を探る形で解決を図った結果として、各々の語について使い分けに資する結果を得ること

ができたと考える。以下では、得られた結果に対して、なぜそのような結果になったのかについて考察を行う。

まず、J-TOCCにおける出現数は、「勉強する」が164件であり、「習う」(62件)や「学ぶ」(49件)と比べて際立って多いことが確認された。それでは、なぜこのように出現数に差が生じるのだろうか。

この点については、第2章で述べたように、張(1986, p.50)では、「学ぶ」は書き言葉でよく使われることを指摘している。また、筆者が中納言のコーパス横断検索機能である「まとめて検索『KOTONOHA』」を用いて検索を行った結果、「勉強する」と「習う」の2語は話し言葉として使われやすいのに対して、「学ぶ」は書き言葉として使われやすいという結果が出た。この傾向は、J-TOCCの出現傾向と類似していると言える。つまり、「学ぶ」はやや硬い語であり、書き言葉的な文脈で使用される傾向があるため、J-TOCCのような日常会話のコーパスでの出現頻度は相対的に低くなるのではないかということである。

次に、J-TOCCにおいて、「勉強する」と

表7 J-TOCCにおける対象語彙の話題別出現数とLLR

話題 語彙	勉強する		習う		学ぶ	
	出現数	LLR	出現数	LLR	出現数	LLR
01 食べること	1(0.61%)	-15.258	0	-8.365	1(2.04%)	-2.173
02 ファッション	5(3.05%)	-4.530	0	-8.734	3(6.12%)	-0.037
03 旅行	9(5.49%)	-0.378	1(1.61%)	-3.579	2(4.08%)	-0.599
04 スポーツ	7(4.27%)	-1.886	31(50%)	85.156	1(2.04%)	-2.369
05 マンガ・ゲーム	10(6.10%)	-0.130	1(1.61%)	-3.726	4(8.16%)	0.136
06 家事	10(6.10%)	-0.117	5(8.06%)	0.159	2(4.08%)	-0.643
07 学校	40(24.39%)	51.589	3(4.84%)	-0.364	4(8.16%)	0.166
08 スマートフォン	11(6.71%)	0.003	1(1.61%)	-3.521	3(6.12%)	-0.018
09 アルバイト	11(6.71%)	-0.000009	0	-8.617	9(18.37%)	7.441
10 動物	2(1.22%)	-11.837	2(3.23%)	-1.501	1(2.04%)	-2.341
11 天気	10(6.10%)	-0.094	9(14.52%)	4.665	3(6.12%)	-0.026
12 夢・将来設計	27(16.46%)	19.371	1(1.61%)	-3.418	6(12.24%)	2.156
13 マナー	2(1.22%)	-12.218	7(11.29%)	1.592	4(8.16%)	0.118
14 住環境	5(3.05%)	-3.987	0	-8.356	1(2.04%)	-2.168
15 日本の未来	14(8.54%)	1.165	1(1.61%)	-3.306	5(10.2%)	1.028
合計	164(100%)	/	62(100%)	/	49(100%)	/

「習う」に関しては、使用されやすい話題を見出しができた。具体的には「勉強する」は「学校」と「夢・将来設計」の話題に使用されやすく、「習う」は「スポーツ」の話題に使用されやすいことを明らかにした。その一方で、「学ぶ」に関しては、顕著な話題的特徴は見出されなかつたが、比較的話題的汎用性の高い語であると捉えることもできる。では、なぜ「勉強する」「習う」「学ぶ」は上記のような話題的特徴が導かれたのであろうか。

本研究では、その要因は「ヲ格名詞」の特徴によって裏付けられると考える。具体的には、追加分析として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下BCCWJ）』⁽¹⁸⁾を用い、NINJAL-LWP for BCCWJ（以下、NLB）⁽¹⁹⁾を検索ツールとして、「勉強する」「習う」「学ぶ」の「ヲ格名詞」の検索を行った。なお、抽出した条件は頻度10以上である。また、BCCWJを選んだ理由は、規範の守られる傾向のある書き言葉を収録したコーパスであるためヲ格名詞を追跡しやすく、また、文脈もたどりやすく、例文の数も比較的豊富であるためである。

さらに、抽出された「ヲ格名詞」に対して

は、国立国語研究所（編）（2004）の『分類語彙表（増補改訂版）』を参照し、カテゴリー分類を行った。最後に、その結果から頻度とMIスコア⁽²⁰⁾を考慮しながら代表的なコロケーション（特徴的なコロケーション）をまとめた。その結果が以下の表8である。

表8を見ると、「勉強する」は言語や学問・学科を表す「～語」や「～学」と共起する傾向が強い。また、「習う」は「英会話」「ピアノ」などの身体的動作を伴う技能活動と共に起する傾向があることがわかる。一方で、「学ぶ」は幅広い「ヲ格名詞」と共起でき、特に「こと」などの連体修飾構造を伴った形式名詞と共に起することが分かった。

ここで、「勉強する」が「学校」という話題において多く使用されるのは、学校という場所が基本的には知識を身につける場であることと関係していると考えられる。また、「夢・将来設計」の話題においても比較的頻度が高いことについても、夢や将来を実現させるために必要な資格などを知識として身につける必要があるからではないだろうか。

また、「習う」に関しては特徴的な話題とし

表8 BCCWJにおける五つの語彙の「ヲ格名詞」のコロケーションの特徴

対象語彙	高頻度のカテゴリー	代表的なコロケーション
勉強する	「言語」 「学問・学科」	「日本語」 「英語」 「語」 「学」
習う	「言語」 「楽器・レコード」	「英会話」 「ピアノ」 「英語」
学ぶ	「事柄」 「言語」 「方法」 「学問・学科」	「こと」 「もの」 「蘭学」 「手話」 「教訓」 「中国語」 「医学」 「技法」 「ノウハウ」 「マナー」 「英語」 「学問」 「術」

て、「スポーツ」が抽出された。「習う」のヲ格に出現する名詞の特徴についても、「英会話」や「ピアノ」といった身体的動作を伴うものと共に起する傾向がある。この点を踏まえると、「習う」が「スポーツ」の話題において多く使用されるのは、スポーツが基本的に身体的動作を伴うものであることに起因しているためと考えられる。

一方で、「学ぶ」は幅広い話題で使用される傾向があるのは、幅広い「ヲ格名詞」と共起しやすい特徴と関連しているためだと考えられる。

BCCWJ を用いて検索した結果、ヲ格名詞については、「勉強する」「習う」「学ぶ」の間で重なる部分が大きいことが明らかとなった。具体的には、『分類語彙表（増補改訂版）』におけるカテゴリーを用いて説明するならば、「言語」というカテゴリーは「勉強する」、「習う」、「学ぶ」の3つの語において出現していた。また、「学問・学科」というカテゴリーについても、「勉強する」と「学ぶ」の両方に出現していた。しかしながら、話題的特徴には明らかな違いが見られる。そのため、この3語に関しては、話題的特徴をもって使い分けの提案を行うことが可能であると考えられる。また、「学ぶ」は書き言葉として使われやすいという結果を踏まえると、読む活動や書く活動を中心に導入していく必要のある語であることも示唆される。

最後に、第1章で提示した誤用例を再掲する。

- (1) a. ? 健康のために、水泳を勉強します。
(中国語母語話者による作文、筆者収集)
- (2) a. ? 中学校の時に心理学を習った。
(中国語母語話者による作文、筆者収集)

まず、(1a) の文脈から見ると、「スポーツ」の話題であることがわかる。「習う」はスポーツに関する話題において突出して使用されるため、「水泳を習います」とするのが適切であると説明を与えることが可能となる。

次に、(2a) は学校で心理学という学科の授業を受けている文脈から、「学校」という話題

の範疇に属すると考えられる。「勉強する」は「学校」や「夢・将来設計」の話題で頻繁に使用される傾向があるため、この場合は「勉強した」と表現するのが適切である。

このように、本研究は先行研究の限界を克服するため、「話題」という観点から分析を行った結果、「勉強する」「習う」「学ぶ」の使い分けに資する情報を提供した点で、日本語教育に新たな知見を提供できたと考える。

6. まとめと今後の課題

本研究では、「勉強する」「習う」「学ぶ」の3つの語彙を対象として、それぞれがどのような話題で使用されやすいのかという研究課題を設定し、J-TOCC を用いて分析を行い、それぞれの語彙の話題的特徴を明らかにした。また、考察においては、「まとめて検索『KOTONOHA』」および BCCWJ を用い、分析結果に対する裏付けを行った。その結果を以下にまとめる。

- ① 勉強する：幅広い話題で使用されるが、特に「学校」「夢・将来設計」などの話題で頻出する。
- ② 習う：「スポーツ」などの話題に偏りが見られた。
- ③ 学ぶ：幅広い話題で用いられる。また、特定の話題に限定されない。

今後の課題として、4点を挙げる。

まず、今回は動詞表現を中心に考察したが、実際には「勉強」「学び」のような名詞も存在している。今回見出した話題的特徴が「勉強」「学び」にも適応できるものなのか、別の話題的特徴が観察されるのか考察する必要がある。

次に、今回は「勉強する」「習う」「学ぶ」の3つの表現を取り上げて分析したが、同じ意味を表す実質語は「学習する」「教わる」などもある。今回の「話題」の分析・考察を足掛かりにして、「～を身につける」を表す動詞群のネットワークの記述を広げていくことができると考えられる。

さらに、上記の研究対象語彙の話題的特徴が日本語学習者にどの程度有効であるかを検証する必要があると考える。具体的には、「勉強する」「習う」「学ぶ」の話題的特徴を反映させた文脈を設定し、日本語学習者を対象に、話題的特徴を提示する前後で語彙補完テストを2回実施し、その結果を比較することで有効性を検討することができると考えられる。

最後、中国語母語話者を念頭におくと、当該学習者に配慮した導入を目指すためには、「勉強する」「習う」「学ぶ」「学習する」「教わる」と対照させるかたちで「学习」という中国語の形式についても分析・対照を行う必要がある。中国語を母語とする日本語学習者の母語知識を活かした使い分け規則を構築したい。

〔註〕

- (1)『新经典日本语基础教程』は中国最大の外国語教育出版社である外国语教育与研究出版社が出版された中国語話者のための日本語シリーズ教材である。
- (2)『新版中日交流标准日本语』は、光村図書出版株式会社（日本）と人民教育出版社（中国）によって共同編集された主に中国語話者向けの日本語教科書である。この教材は、日本語を独習する中国人の80%以上に愛用され、読者数は1000万人を超えているとされている。詳細はOJAD（Online Japanese Accent Dictionary）のウェブアドレス（<https://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/search/index/textbook:6/order:name>）を参照されたい。
- (3)『大家的日语』は株式会社スリーエーネットワークが編集した中国語版の『みんなの日本語』である。『みんなの日本語』は外国人のための日本語教材として日本国内外で幅広く使われている。詳細は『大家的日语』のまえがきを参照されたい。
- (4)確認した6冊の類義語辞書は大野晋・浜西正人（編）(2008)『角川 類語新辞典』、柴田武・山田進（編）(2003)『類語大辞典』、柴田武・山田進・加藤安彦・糸山洋介（編）(2008)『講談社 類語辞典』、小学館辞典編集部（編）(1994)『使い方の分かる類語例解辞典』、中村明・芳賀綏・森田良行（編）(2005)『三省堂類語新辞典』、安田章（編）(2006)『文章表現のための類語類句辞典』である。
- (5)国立国語研究所が編纂した『分類語彙表（増補改訂版）』は、日本語の語彙を体系的に整理し、意味的なカテゴリーごとに分類した語彙リストである。『分類語彙表』は、現代の日常社会で日常的に用いられる語を中心、各種語彙調査の結果を踏まえ選定した語彙を収録し、それぞれの語がどのような意味範疇に属するかを明確に示している。このような分類は、日本語教育における語彙指導や辞書編纂、言語研究において重要な役割を果たし、日本語の語彙体系の理解を深めるための基盤となる。特に、語彙の意味関係を明確にすることで、学習者の語彙習得を促進し、言語研究者にとっては語彙の体系的分析を可能にする点において有用である。『分類語彙表』の初版が刊行されたのは、1964年である。2004年に増補改訂版を出し、収録した総語数（延べ語数）約9万6千語である。なお、柏野（2019, p.143）では、「語が本来持つ性質によって分類することを優先する「属性分類」が行なわれている。」と述べている。そのため、『分類語彙表（増補改訂版）』は語彙をその特徴と性質、品詞に基づき、分類する。『分類語彙表（増補改訂版）』の分類体系は、日本語語彙を体系的に整理するために品詞論的な大分類の「類」から始まり、その下に「部門」、「中項目」、「分類項目」を配置する多層構造を持つ。まず大分類の「類」として、1. 体の類（名詞） 2. 用の類（動詞） 3. 相の類（形

- 容詞・形容動詞・副詞・連体詞) 4. その他の類(一部の副詞・接続詞・感動詞)の4類に分ける。「部門」として体・用・相の各類に「抽象的関係」「人間活動の主体」「人間活動－精神および行為」「人間活動の生産物－結果および用具」「自然－自然物および自然現象」の5つの部門に分ける。ただし、用・相の類は「人間活動の主体」と「生産物および用具」の部門を欠く。続いては「中項目」と「分類項目」である。例えば、「1.3131」のように類を整数位に置いて小数点以下4けたの「分類番号」が付されている。小数点の1けたは「部門」を代表し、2けたは「中項目」を代表し、3と4けたは「分類項目」を代表している。例えば、「1.3131 話・談話」という分類番号では、以下の意味を持つ。1: 体の類(名詞) 3: 人間活動－精神および行為(部門) 31: 言語(中項目) 31: 話・談話(分類項目)。詳細は『分類語彙表(増補改訂版)』のまえがきと元版のまえがき(pp. 3-16)を参照されたい。
- (6) 「まとめて検索『KOTONOHA』」は、中納言を用いて検索可能なコーパスを1度にまとめて検索し、その集計結果をユーザーに表示することができる。「まとめて検索『KOTONOHA』」の詳細は国立国語コーパス開発センター公式ホームページ(<https://clrd.ninjal.ac.jp/kotonoha.html>)で参照できる。「まとめて検索『KOTONOHA』」の検索条件は短単位モードのみであるため、短単位で検索を行う。検索条件は以下の通りである。「勉強する」: キーの「語彙素」は「勉強」、後方共起キーから1語の「語彙素」は「為る」である。「習う」: キーの「語彙素」は「習う」である。「学ぶ」: キーの「語彙素」は「学ぶ」である。「検索対象」は「話し言葉・書き言葉」である。
- (7) 調整頻度とは、コーパスの規模の差異にかかわらず、単語の出現回数(粗頻度)を公平に比較するために、粗頻度を基に

算出される頻度である。例えば、規模の異なるコーパスにおいて同一の単語を調査する場合、単純な出現回数(粗頻度)をそのまま比較することは適切ではない。そのため、異なるコーパス間で単語の出現率を統一基準で比較する指標として、PMW(Per Million Words, 100万語あたりの出現頻度を示す単位)が用いられる。PMWを適用することにより、コーパスの規模の違いに依存せず、単語の出現傾向を適切に評価することが可能となる。

- (8) 話題とは、特定の言語活動を遂行する際に必要とされる概念のまとめであり、学習の目的や場面に応じて体系的に整理されたものである(山内 2013c, pp.1-3)とされる。具体的には、今回の研究対象である「習う」に関して言えば、J-TOCCの分析結果によって、「習う」はスポーツの話題において頻繁に使用されることが明らかになった。このことから、「習う」の話題的特徴としては、スポーツの話題において使用される傾向あることを述べることができる。この点を踏まえると、話題的特徴とは、今回の研究対象である語彙がどの話題において頻繁に使用されるかを示すものであるということになる。この話題的特徴を抽出することにより、語彙の選択(特に類義語の使い分け)に対して有益な指標を提供できると考えられる。
- (9) 『日本語話題別会話コーパス: J-TOCC』は、「話題が語彙・文法・談話ストラテジーなどに与える影響を検討するため」(中俣他 2021, p.11)に構築されたコーパスである。語数は記号を除くと延べ語数は約165万語であり、異なり語数は約4万語である。15の話題の選定方法について、中俣他(2021, p.13)では、山内(編)(2013b)に掲載された100話題を基に、15前後の話題を目標にし、山内(2018, p.5)の情報に従い、親密度・必要度によって話題を3段階に分け、その内の親密

- 度・必要度 III の 48 の話題を除外し、「大学生にとって身近である」などの観点で 11 の話題を選定している。その 11 の「身の回りの話題」は「食べること」「ファッション」「旅行」「スポーツ」「マンガ・ゲーム」「家事」「学校」「スマートフォン」「アルバイト」「動物」「天気」である。また、「様々な話題」を扱うコーパスを構築するため、「身の回りの話題」である 11 の話題に加え、「社会にかかわる内容も含む話題」も 4 つ追加している。この 4 つの話題は親密度・必要度 III の話題も含まれている。具体的な話題は「夢・将来設計」「マナー」「住環境」「日本の未来」である。
- (10) grep 検索とは、Linux や Unix などのオペレーティングシステムで使用できるコマンドである。名前は「global（全体）、regular expression（正規表現）、print（表示）」の略に由来する。このコマンドは、複数のテキストファイルから特定の文字列や正規表現に一致する行を探し出し、表示するための検索ツールである。本研究は grep 検索を用い、J-TOCC の corpus というフォルダの 1800 ファイルから本研究の対象語彙の検索条件（正規表現）（例えば、勉強〔さしすせで〕）と一致する行の検索を行うものである。
- (11) 正規表現とは、文字列のパターンを指定するための特別な表記法である。これにより、テキスト検索やデータ抽出などを効率的に行うことができる。本研究では、正規表現の記法である「[]」を使用した。「[]」の中に含まれるいずれかの文字に一致する文字列を検索する際に用いられる記法である。具体的には、「勉強〔さしすせで〕」という検索条件を設定すると、「勉強さ」「勉強し」「勉強す」「勉強せ」「勉強で」の 5 つのパターンに一致する文字列を一括で検索することが可能である。このように、正規表現を活用することで、多様なパターンを効率よく抽出できるものである。
- (12) 「名詞+格助詞」の形式としての「勉強で」は本研究の研究対象ではないため、その部分のデータを削除した。なお、検索条件に「で」を含めた理由は「勉強できる」のような、可能形の例を収集するためであった。
- (13) 本研究においては各用語を次のように定義する。①「該当資料での該当語の度数」とは、J-TOCC における特定話題での出現頻度を指す。②「参照資料での該当語の度数」とは、J-TOCC に含まれる 15 の話題全体での出現頻度を指す。③「該当資料の延べ語数」とは、J-TOCC における特定話題の延べ語数（記号を除く）を指す。④「参照資料の延べ語数」とは、J-TOCC に含まれる 15 の話題全体の延べ語数（記号を除く）を指す。なお、J-TOCC における特定話題および 15 話題全体の延べ語数（記号除去後）については、中俣他（2023, p.26）において紹介されているデータの内容を参照した。
- (14) 文脈の判定は 3 名の日本語母語話者に依頼した。3 名の日本語母語話者のうち、1 名は日本語教育経験者であり、他の 2 名は国語教育経験者である。
- (15) J-TOCC は会話コーパスであるため、話の省略や言い直し、言いさし、言い間違いなどが含まれる可能性がある。しかし、これらは検索条件に含まれていないため、今回の検索条件では抽出することができない。そのため、J-TOCC における「勉強する」「習う」「学ぶ」「学習する」の検索結果には、話の省略や言い直し、言いさし、言い間違いなどのデータは含まれていない。
- (16) J-TOCC における「男女」「男男」「女女」という表記は、会話参加者の性別の組み合わせを示している。例えば、「男女」は、大学生の男性と女性によるペア会話を指す。本研究では性別差に着目した分析は行っていないものの、こうした性別表記によって、用例の所在を容易に確認することが可能である。具体的には、J-

- TOCCの用例を確認する際には、まず話題名でフォルダを選択し、次に「東日本」または「西日本」といった録音地によって下のフォルダを開き、その中で「男女」「男男」「女女」といった性別の組み合わせでさらに下位フォルダを開く。そして、最終的にはその中にある番号付きのファイル（音声・文字起こしデータ）を選んで確認するという構造になっている。
- (17) コロケーションとは、ある語が他の語と結びついて現れる語の組み合わせを指す。具体的に言えば、ここでは、コロケーションという語を、研究対象語彙である「勉強する」「習う」「学ぶ」の各動詞と、ヲ格をとる名詞（「ヲ格名詞」）との共起関係として定義している。
- (18) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』は、国語国立研究所が現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築した均衡コーパスである。現在、日本語の書き言葉について唯一の均衡コーパスであり、規模は約1億430万語である。BCCWJは「出版サブコーパス」「図書館サブコーパス」と「特定目的サブコーパス」の3種類のサブコーパスからなる。「出版サブコーパス」とは2001年～2005年に出版された「書籍」「新聞」「雑誌」を対象とするものであり、約3500万語である。「図書館サブコーパス」とは東京都の13自治体以上の図書館に所蔵されている「書籍」で、対象期間は1986年～2005年まであり、収録語数は約3000万語である。「特定目的サブコーパス」とは、様々なジャンルの文章を集めたものであり、その中に「白書」「ベストセラー」「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」「法律」「国会会議録」「広報紙」「教科書」「韻文」があり、収録対象の刊行年代は、最大30年間（1976～2005）である。「特定目的サブコーパス」の収録五数は約3500万語である。合わせて、BCCWJは3種類のサブコーパスで13のジャンルがある。各ジャンルについて無

作為にサンプルを抽出している。

- (19) NINJAL-LWP for BCCWJ(以下、NLB)は国語国立研究所とLago言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。NLBは名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的な振る舞いが網羅的に表示される。また、頻度だけでなく、共起関係の強さを表す統計的指標であるMIスコアも併せて表示される。
- (20) 国立国語研究所とLago言語研究所がNINJAL-LWP for BCCWJ ユーザマニュアル1.40においては、「MIスコアは統計指標の1つで、特徴的なコロケーションほど数値が高くなる傾向があります。ただし、低頻度のコロケーションの数値が過剰に高くなるため、低頻度のものを排除する必要があります。」と述べている。つまり、MIスコアは、共起関係の強さを測る統計的指標であり、特徴のあるコロケーションを特定することができる。しかし、今井（2019）は頻度の影響を受けやすいことを指摘している。その場合は適切な頻度の制限を設ける必要がある。この点について本研究では頻度を10以上に設定することで、頻度からの影響を最小限に留めることができていると考えられる。また、本研究における代表的なコロケーション（特徴的なコロケーション）とは、他の語と強く結びついている語の組み合わせのことを指す。例えば、「習う」の頻度10以上の「ヲ格名詞」において、頻度とMIスコアが共に高い名詞に「ピアノ」がある。そのため、「ピアノ」は「習う」の代表的なコロケーション（特徴的なコロケーション）であることになる。

参考文献（五十音順）

- [1] 喬功雄（2017）「産出のための文法～「100%を目指さない文法」～」喬功雄〔編〕『一步進んだ日本語文法の教え方1』pp.138-141, くろしお出版
- [2] 今井新悟（2019）「コーパスの日本語テス

- トへの応用」プラシャント・パルデシ, 粕山洋介, 砂川有里子, 今井新悟, 今村泰也 (編)『多義語動詞分析の新展開と日本語教育への応用』pp.158-173, 開拓社
- [3] 岩佐靖夫 (2011) 「日本語教育における類義語指導の一考察—系統的な指導原理へ向けて提言—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』20:17-24.
- [4] 太田陽子 (2023) 「地域・性別によるオノマトペの使用傾向」中俣尚己 (編)『話題別コーパスが拓く日本語教育と日本語学』pp. 141-155, ひつじ書房
- [5] 柏野和佳子 (2019) 「『分類語彙表』の特徴と位置付け」『日本語科学』19:143-160
- [6] 賀静彬・尹貞姫・陳麗 [編] (2019)『新经典日本语基础第三册 (第二版)』外语教学与研究出版社
- [7] 賀静彬・于飛・胡小春 [編] (2019)『新经典日本语基础程第一册 (第二版)』外语教学与研究出版社
- [8] 金澤裕之・山内博之 [編] (2022)『一語から始める小さな日本語学』ひつじ書房
- [9] 金昌奎 (2015) 「「教わる」「習う」「学ぶ」の使い分けに関する研究」『日本文化學報』67:25-48.
- [10] 曲鳳鳴 (2015) 「中日“学习”一词的比较」『考试周刊』88: 22
- [11] 権奇洙 (2017) 「日本語における学習動詞の一考察—「習う」と「学ぶ」を中心として—」『동북아 문화연구』50:241-256.
- [12] 国立国語研究所 [編] (2004)『分類語彙表 (増補改訂版)』大日本図書株式会社
- [13] 柴田武・山田進 [編] (2003)『類語大辞典』講談社
- [14] 小学館辞典編集部 [編] (1994)『使い方の分かる類語例解辞典』小学館
- [15] 鐘勇 (2021) 「基于概念空间的日语近义词可视化分析—以「勉強する・習う・学ぶ・学習する」为例」『高等日语教育』01:69-79; 164-165
- [16] 人民教育出版社・光村図書出版 [編] (2013)『新版中日交流标准日本语 初級(上) 第二版』人民教育出版社
- [17] 人民教育出版社・光村図書出版 [編] (2013)『新版中日交流标准日本语 中級(上) 第二版』人民教育出版社
- [18] 人民教育出版社・光村図書出版 [編] (2013)『新版中日交流标准日本语 中級(下) 第二版』人民教育出版社
- [19] スリーエーネットワーク [編] (2012)『大家的日语 初級1 (第2版)』外语教学与研究出版社
- [20] スリーエーネットワーク [編] (2010)『大家的日语 初級1 (第1版)』外语教学与研究出版社
- [21] 蘇丹 (2015) 「日本語の類義語意味分析に関する一考察」西安外国语大学修士論文
- [22] 建石始 (2023) 「話題は類義語分析に使える」中俣尚己 [編]『話題別コーパスが拓く日本語教育と日本語学』pp. 211-228, ひつじ書房
- [23] 田中牧郎・近藤明日子 (2011) 「教科書コーパス語彙表」『言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』pp.55-63, 文部科学省科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築: 21世紀の日本語研究の基盤整備」言語政策班
- [24] 張濟卿 (1986) 「“勉強する・習う・学ぶ・教わる”的区別」『日語學習与研究』03:49-50.
- [25] 中俣尚己 (2023) 「プロジェクトの紹介と本書の構成」中俣尚己 [編]『話題別コーパスが拓く日本語教育と日本語学』pp. 3-13, ひつじ書房
- [25] 中俣尚己・小口悠紀子・小西円・建石始・堀内仁 (2023) 「『話題別日本語語彙表』の解説」中俣尚己 [編]『話題別コーパスが拓く日本語教育と日本語学』pp. 33-51, ひつじ書房
- [26] 中俣尚己・小口悠紀子・小西円・建石始・堀内仁 (2021a) 「自然会話コーパスを基にした『話題別日本語語彙表』」『計量国語学』33(3):194-204
- [27] 中俣尚己・太田陽子・加藤恵梨・澤田浩子・清水由貴子・森篤嗣 (2021b) 「『日本

- 語話題別会話コーパス：J-TOCC』』『計量国語学』33(1): 11-21
- [28] 橋本直幸 (2018) 「語彙習得を促す「話題別読解」の提案」岩田一成 [編] 『語から始まる教材作り』 pp.31-44, くろしお出版
- [29] 林伸一 (2012) 「「学ぶ」「学習する」「勉強する」：意味分析と語用論（教育実践の原理と方法）」『教育学研究紀要』58(2) :315-320.
- [30] 北京对外經濟貿易大学・北京商務印書館・小学館 [編] (1995) 『日中辞典』 小学館
- [31] 峯村和江 (1978) 「「教える・教わる」と「習う・学ぶ・勉強する」」『日本語研究』1:110-122.
- [32] 山内博之 (2013a) 「日本語教師の能力を高めるための類似表現研究」『日本語 / 日本語教育研究』4:5-20
- [33] 山内博之 [編] (2013b) 『実践日本語教育スタンダード』ひつじ書房
- [34] 山内博之 (2013c) 「序章 実践日本語教育スタンダードとは」山内博之 [編] 『実践日本語教育スタンダード』 pp. 1-3, ひつじ書房
- [35] 山内博之 (2018) 「話題による日本語教育の見取り図」岩田一成 [編] 『語から始まる教材づくり』 pp. 3-15, くろしお出版

WEB検索ツール

- [1] 国立国語研究所「まとめて検索『KOTONOHA』」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp>)
研究データ閲覧日 2024年5月6日 - 2024年5月13日, 最終閲覧日 2025年1月20日
- [2] 国立国語研究所・Lago言語研究所『NINJAL-LWP for BCCWJ』(<https://nlb.ninjal.ac.jp>) ver.1.40
研究データ閲覧日 2024年8月6日 - 2024年9月15日, 最終閲覧日 2025年7月23日
- [3] 『日本語話題別会話コーパス :J-TOCC』(<http://nakamata.info/database/>)
圧縮ファイルをダウンロードした日 2023年11月9日 (バージョン 20220829)
研究データ閲覧日 2024年9月12日 - 2024年9月25日, 最終閲覧日 2025年7月24日
- [4] 秀丸エディタ (<https://hide.maruo.co.jp/software/hidemaru.html>)
ダウンロードした日 2024年9月11日 (ver.9.37)
使用日 2024年9月12日, 最終使用日 2025年1月19日

Differences in the Usage of “Benkyou suru”, “Narau” and “Manabu” —From the Perspective of Topics in Which They Are Used—

Li Xing

University of East Asia, Graduate School of Comprehensive Scientific Research
Xianyang Normal University, China
173037352@qq.com

Abstract

The three Japanese verbs “benkyou suru” (to study), “narau” (to learn), and “manabu” (to study/learn) share the common meaning of “acquiring something.” Therefore, for Japanese language learners, merely understanding the meanings of these words is not sufficient to enable their appropriate usage, resulting in difficulties in distinguishing between them.

This study aims to reduce learners’ cognitive burden by clarifying the appropriate usage of these words from the perspective of “topics.” Using the Japanese Topic-Oriented Conversation Corpus (J-TOCC), the topic-based characteristics of each verb were analyzed. The results revealed the following tendencies:

- ① **Benkyou suru:** used across a wide range of topics, particularly frequent in themes such as “school”, “dreams and future plans”.
- ② **Narau:** frequently used in contexts related to “sports”.
- ③ **Manabu:** used across a wide range of topics and is not limited to any specific topic.

Based on the above analysis, it is suggested that in teaching the distinctions among “benkyou suru”, “narau”, and “manabu”, focusing on the differences in the topics where each word tends to appear can lead to more practical and less burdensome instruction for learners.

Keywords: Benkyou suru, Narau, Manabu, Topical features